

森本あんり 著

『不寛容論——アメリカが生んだ「共存」の哲学』

(新潮社, 2020年, 1,760円)

現代において寛容であることは誰しものが身につけるべき美德のように考えられている。しかし、本書冒頭に登場する「寛容のパラドックス」という言葉はそのような思い込みを打ち砕く。不寛容であることを非難して、寛容になれと言うことは「寛容の強制」という不寛容にほかならないからである。それでは「自らが認めたくないもの」にどう対処したらよいのであろうか。そもそも、寛容とはいかなる心の姿勢なのだろうか。本書はこうした問題意識のもとに、アメリカ植民地期の正統派ピューリタンの不寛容に抵抗しつづけたロジャー・ウィリアムズという異能の人物の生涯を通してアメリカ的寛容の生成過程を追跡した労作である。

著者はアメリカ的寛容の起源は中世の寛容論にあるとする。そこにおける寛容とは、「悪」が及ぼす程度を比較考量したうえでそれへの対応を決定する治安維持策とあってよい。つまり、社会にユダヤ教徒などの非キリスト教徒が存在したとしても、彼らの社会に及ぼす害悪が彼らを迫害することによって生じる害悪よりも少ないと判断されれば、そうした存在を周縁化したうえで社会に留めておくというのが中世的寛容だったのである。この「比較の上での容認」という寛容はアメリカ植民地のピューリタンに引き継がれた。ただし、マサチューセッツ植民地当局がバプテストやクェーカーを徹底的に弾圧したのは、それらの存在がもたらす「悪」を頑として容認しなかったからであるが。

ロジャー・ウィリアムズもまたマサチューセッツの政教協力体制を再三にわたって批判した「悪」のために追放された人物である。追放後、ウィリアムズはインディアンから譲り受けた土地をプロヴィデンスと名付け、この地において国王勅許状で示された「活ける実験」Lively Experiment, すなわち政教分離社会の建設に取り組むことになる。

本書では以上の波乱に富んだウィリアムズの生涯が詳細に描かれている。そこから浮かび上がるのは、「不寛容」に対して抵抗した異議申し立て者としてのウィリアムズの姿だけでなく、クェーカーというかつての自分のような異議申し立て者に「寛容」を示した植民地建設者としてのウィリアムズの姿である。

以上から著者が主張するのは、「礼節」を伴った寛容の重要性である。ウィリアムズはインディアンの宗教を認めず、首狩りなどの風習にもあからさまな嫌悪感を示したが、彼らの宗教儀式を妨害することはなかった。その信仰は断じて認められないとしても、インディアンの心の中には何人たりとも干渉できないからである。これがウィリアムズのたどり着いた寛容だったのである。

現代にもウィリアムズが生きた時代の「インディアン」がいるのではないだろうか。そうした存在に対して私たちはウィリアムズのような寛容を示せるだろうか。本書はこのことを考えさせてくれる良書である。

小原豊志 (東北大学)